

礼拝：2021年9月12日 聖霊降臨節第17主日

讃美：445

交読：交読詩編15編1～5b節

聖書：創世記45章1～15節

マタイによる福音書18章21～35節

説教：「愛してやまず」 柳澤 宗光

マタイによる福音書18章は、主イエスが、教会における人と人との関わりについて、語られています。その根底に流れているものは、大地の下を、滔々と流れる伏流水のような、〔主の愛〕です。伏流水が大地の木々を豊に潤すように、〔主の愛〕が、わたしたち、「小さな者（マタ18:6）」の命を豊に潤して下さるのです。今朝、与えられた聖書箇所は、その、〔主の愛〕について語られた18章の締め括りとして置かれています。わたしたちは、この譬え話により、わたしたちに対する〔主の愛〕を、再び知ることとなるのです。

18章の初め、弟子たちの間で、「いったい誰が天の国で一番偉いのか（マタ18:1）」という論争が始まります。主イエスは、「はっきり言っておく、心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることは出来ない。自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ（マタ18:4）。」と、高らかに宣言されます。決して疑わず、疑うことすら知らず、愛を信じ、愛だけを信じ、自分の全身全霊を、愛してくれる者に委ねる子ども。その様な者だけが、天の国に入れると言われるのです。そして、「このような一人の子供を受け入れる者（マタ18:4）」こそが、〔主イエスの愛〕を受け入れる者であると、宣言されているのです。ですから、〔主イエスの愛〕を信じる「これらの小さな者の一人をつまずかせる者は、大きな石臼を首に懸けられて、深い海に沈められる方がましである（マタ18:6）。」とまで、言われるのです。言い切るほどに、主イエスは、私たちが憐れみ、私たちが愛して下さっているのです。〔主イエスの愛〕に、生涯の全てを委ねる「小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい（マタ18:10）。」とされています。主イエスは、「失われたものを救うために来た（マタ18:11）。」のです。真の愛を見いだすことが出来ず、真の愛を見失い、迷える小羊を救うために来られたのです。小さな者は、〔主イエスの愛〕を求め、〔天の父の愛〕を求め、「天の父の御顔を仰いでいる（マタ18:11）」のです。ただただ、〔主の憐れみ〕、〔主の愛〕だけを求めているのです。

主イエスが、それらの譬え話を、語られるのを聞き、弟子ペトロは、具体的に、いったい何が自分に求められているのかが、気になります。この「人と人のかかわり」に関して、いったい自分にはどこまで要求されているのか、知りたいのです。そこで、ペトロは、主イエスに尋ねます。「主よ、兄弟がわたしに対して罪を犯したなら、何回赦すべきでしょうか。七回までですか（マタ18:21）。」。間違いなく、ペトロは七回が回数としては多く、ほとんどの人が人を赦すことのできる回数以上である

と考えたのでしょう。しかし、「あなたに言うておく。七回どころか七の七十倍までも赦しなさい（マタ18:22）。」と、主イエスは応えられるのです。

そして、主イエスは、いつもなさるように、譬え話をもって、語り始めます。家来たちに貸した金の決済をしようとする王の物語です。その決済の日、連れて来られた家来には、とてつもない額の借金がありました。1万タラントンの借金です。現代になおせば、おおよそ600億円です。明らかに、この家来はそんな額を返済することは出来ません。王は彼も家族も身売りをするように命じます。もはや、これまでだと悟った「家来は、ひれ伏し、『どうか待ってください。きっと全部お返します』としきりに願った（マタ18:26）。」のです。しかし、それは、とても出来もしない約束です。仮に、年に6億円ずつ返せたとしても、100年は掛かるような借金です。これだけの借金を返済すると言うことは、とても現実的な話ではありません。しかし、王は、家来が、床にひれ伏し嘆願する姿に心を動かされ、家来を憐れに思い解放し借金を赦してしまうのです。王は、少なくともこの家来に関して言えば、明らかに帳簿的には破綻してしまいます。ここで、王が、家来とのかかわりを継続したいという道を選んだことは、明らかです。しかし、その理由は、家来には計り知れず、家来自身が最も驚いたことでしょう。ただただ、王は、家来の負債を帳消しにし、家来に再び歩み出す自由を与えた事は事実なのです。

この後すぐに、この家来は、自分に借金がある仲間と出会います。王から与えられた憐れみ。その恩を返すチャンスが、突然、到来したのです。しかし、自分に百ゼナリオン、現代のおよそ10万円の借金をしている仲間を赦すことは、全く思い浮かばないのです。心をよぎることすらないのです。その仲間は、「どうか待ってくれ。返すから（マタ18:29）」としきりに頼みます。この言葉は、その家来が、王に向かって懇願した時と同じ言葉（マタ18:26）です。仲間が同じ言葉（マタ18:26,29）を口にした時、その場で、家来は仲間の首を絞め、その仲間を牢に投げ入れてしまった（マタ18:30）のです。その後、この家来がしたことを耳にした王は、彼に同じことをします。王は、家来に対し、「お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ。わたしがお前を憐れんでやったように、お前も自分の仲間を憐れんでやるべきではなかったか（マタ18:33）」と語ります。王の率直な思いが、言葉に滲み出ています。王は、家来に示した憐れみを取り消し、借金をすっかり返済するまで、牢にるように命じる（マタ18:34）のです。王は、家来の不義を憎んでいるのではなく、〔神の愛〕が、見えていないことを嘆いているのです。

しかし、ここで、家来が、〔仲間を赦す理由〕が、〔自分に対する赦しを確保するため〕であってはならないはず（隣人を赦すこと）が、〔自分のため〕であってはならないのです。それは、〔愛から〕ではなく、〔恐怖心から〕することだからです。それは、主イエスの言われることではないことは明らかです。この譬え話は、わたしたちに、地下を流れる愛の伏流水を、見逃してはならないことを教えています。

では、いったい何が、この家来を、そこまでする者、無慈悲な者とさせたのでしょうか。わたしたちに、赦すことが、そもそも出来るとするなら、それは、わたしたちに、赦された経験があるからです。わたしたちの負債が、わたしたちの苦しみが、帳消しにされた時、どのような自分に変えられるのか、変えられたのか、わたしたちは、知っています。その時、わたしたちに出来るたった一つのことは、赦しを乞うこと、ただ、それだけです。わたしたちに赦されていることは、ひたすら祈り続ける事だけなのです。祈り続ける者に、主は、試練と共に、必ず恵み〔主の愛〕を与えます。その時、わたしたちには、伏流水の流れが見え、〔主の愛〕を知る者へと変えて下さるのです。苦しみの後に与えられた恵み。試練と共に与えられた恵み。その赦しを一度でも味わったことがあるならば、どうして〔主の愛〕を、次の人に手渡さずにいられるのでしょうか。

それが、王の知りたがっていることなのです。「お前が頼んだから、借金を全部帳消しにしてやったのだ（マタ 18:32）」と、王は不屈きな家来（マタ 18:32）に言います。家来の負債を帳消しにした王は、なぜ自分と同じことができなかったのかと、この家来に聞いているのです。この譬え話は、表面的には、確かに、黄金律にもとづいた教えです。しかし、この家来は、自分に与えられたことがどれほど重大な恵みであったのか、捉えられなかったことが、この譬え話の論点なのです。王が彼を釈放し、負債を免除した時、この家来は、その恵みの意味するものが、全く分かっていなかったのです。この家来には、自分の負債を返済することなど、決して出来ませんでした。彼はそのことを知っていたし、王も知っていました。ここで、家来は、赦しの貴重な体験を、全く取り逃がしてしまいました。家来は、単に窮地を脱したのではないこと。そして、ただ単に、情にもろい、年寄りの王の目こぼしを戴いた訳ではなかったのだ、ということに全く気づきません。家来には、それが天から与えられた恵み〔神の愛〕である事に気づかなかったのです。いったい何が起こったのか、家来の脳裏をかすめることさえありませんでした。この家来は、とてつもない額の負債を良く理解している方によって、心から赦されたのです。その方は、負債を帳消しにしてまでも、もう一度、互いに深く知り合いたいと願ったのです。本当の赦しとは、和解を求めるものなのです。互いを赦し合う、和解を求める、たった一つの理由は、わたしたちが関係を取り戻したいからです。それは、わたしたちが、負債を記録している間はうまくはいきません。貸しがある限り、どうやって返して貰おうか、ということに心は惑わされ、和解の道に歩み寄る事は出来ません。家来は、仲間の負債を帳消しにはしなかったのです。しかし、心から赦してしまえば、そこには実に豊かな時間があります。そして、もう一度、互いを知り合う時間が与えられるのです。

これが、不屈きな家来が、見落としたことでした。家来は、借金を返済するまで、つまり残された生涯の全てを牢に入れられます。しかし、この投獄は言葉上のものです。不屈きな家来は、最初から牢の中にいたのです。自分で作った自分だけの牢の中に、生きて来たのです。赦されることを拒み、赦すことを拒んだ彼は、独居房に

座り、〔神の愛〕を知らぬままこれからも、独りで生き続けていくのです。〔神の愛〕だけが、和解の道筋を付けて下さることを、知らぬまま生涯を閉じるのです。家来には、王の家来に対する思い、王の家来に対する愛が、目があっても見えないのです。ひれ伏し（マタ 18:26）、懇願するほどまでにした家来。しかし、それは、家来自身の独善的な祈りであって、決して、〔主の愛〕を、求める祈りではなかった事を私たちは、知らされているのです。

今朝の譬え話は、「自分が王に〔して貰いたい〕ように、他の人にしなさい」ということではありません。王を働かせようとするような、主導権は、わたしたちには与えられていません。この譬え話のメッセージは、「すでに王があなたに〔して下さった〕ように、他の人にしなさい」ということなのです。それは、赦しを獲得するにはどうしたらよいか、とか、他の人を見逃してやれば、自分も見逃して貰えるのか、と言った表面的な問題ではありません。

すでに、わたしたちが、〔赦されている〕ことを、理解することが大切です。わたしたちに、〔赦されている〕全てについてです。命の息を吹き込まれ、この地表に置かれていること。今日という日を与えられ、礼拝の場に加えられていること。読書を楽しみ、音楽を愛し、愛する人々との出会い。それら、全て。わたしたちの日常生活の中にある愛すべきもの全てを、恩恵として貸し与えて戴いていること。そして、それらを、わたしたちに与え、与えつくしても、その見返りを求めない方。その方は、わたしたちの膨大な負債を、きわめて詳細に調べ、しかも、わたしたちには、返済の目途は無いことを知っておられます。全てご存じであるその方が、わたしたちの負債を一挙に清算して下さるその理由。そのたった一つの理由は、その方が、わたしたちとの関係を続けていきたいから。ただそれだけなのです。その方が、わたしたちの負債を記録するのを、おやめになったのです。そうであれば、わたしたちも、自分の生活の中で、人の負債を記録していることが、いかに愚かなことなのでしょう。たとえ、七回赦した後、あるいはそれが七の七十倍赦した後（マタ 18:22）であったとしても、全てを無かったことにしたくなるのではないのでしょうか。たった一回だけでも、〔して下さった〕ようにする機会を、わたしたちは、逃すことが出来るのでしょうか。

わたしたちは、何回、赦されているのでしょうか。何回も、何回も、わたしたちが赦されるのは、わたしたちに価値があるからではありません。その方が、わたしたちを「愛して」、「愛してやまず」、「もっともっと愛したいから」、ただ、それだけなのです。

讚美：讚美歌 484

献金

主の祈り

黙祷